

比べ読みを通して、内容項目の理解を深める

～つながりを意識する ICT の活用～

末廣 彩華

はじめに

本年度、特別の教科道徳において意識し授業づくりを行ったのは以下の3つである。

1つ目は、子供が自分の過去と現在を「比較」する意識をもつことで、自分のことを見つめ直し続けることができるようにすること。

2つ目は、子供が年間の授業のつながりや他教科とのつながりを感じることができるようにすること。

3つ目は、自己内対話、仲間との共有などの活動において、「比較」を通して自分の考えを再構成し、子供が自分の成長を実感できるようにすること。

これらは、本校の研究テーマ「子供とつくる学び」を具体化したものである。

「子供とつくる学び」＝自ら進んで学習に向き合い、考え続けることができる子供の姿と捉えている。

特別の教科道徳の授業における

「子供とつくる学び」～年間を通して～

年度当初、子供は特別の教科道徳の授業に対して「当たり前のこと」「善いことは何か」を考える時間、漠然と「自分のため」「社会（将来）につながる」と捉えていた。何となく「よりよく生きる」につながりそうではあるが、「何を学んだか」「何のために学ぶのか」自信を持って語ることができない子供が多かった。

特別の教科道徳の授業こそ、これまでの学びの積み重ねを集約して考えることのできる教科であると考えている。この1時間に価値ある学びを感じ、自分を見つめ、これからに生かすことができる、心が豊かになる授業づくりを心がけてきた。

まず、他教科で用いている「比較」を授業に取り入れ、学びを生かすことのできる時間を設定した。物事のつながりや考え方の共通点や相違点を捉えることが容易でと考えたからである。初めは、淡々と「比較」をして議論をする子供たちであったが、やがて考えを伝える中で「国語の授業と同じように考えると文章が読みやすい」や「算数の式の比較と同じように考えるとわかりやすく伝えられそう」と気づき、他教科との学びを関連させて議論ができるようになった。

次に、内容項目について考える時間を設定した。以下の2つの写真は子供が自分なりに考えて内容項目の学びをまとめたものである。

「主として自分自身に関すること」について

写真①→

それぞれの内容項目ごとにカードの色を変えてまとめている。



写真②→

授業前と授業ごとの振り返り、全体を通しての振り返りをいつでも見られるようにして残している。



学びに入る前の自分と学び後の自分を「比較」することで、学びの連続性を感じると共に、自分の内面と向き合い、今の自分を捉えることができるよう

になった。この活動はICT（ロイロノート）を用いて行った。年間通して行うことで多くの利点があった。特に感じた利点は以下の3つである。

1つ目は、自分の考えを持った上で仲間と共有することができるので、自分の考えと仲間の考えの「比較」が容易であり、交流場面においては考えの根拠として、具体的に相手に伝える姿が見られた。

2つ目は、考えの共有がすぐにできるので、仲間と交流する中で自分の考えとは違うものに出会い、視野を広げ、物事を多面的・多角的に捉えようとする力がついた。

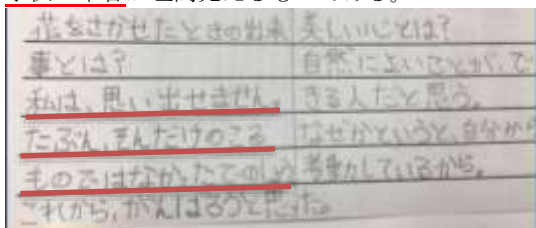
3つ目は、同じ内容項目において自分の考えを「比較」することができ、同じ内容項目を考えているはずなのに、実際の自分の考えが今までと異なっていることに子供自身が驚き、学びの深さを感じる事ができた。

自分の考えの傾向について子供なりに分析する姿が見られた。

年度末の振り返りにおいて、特別の教科道德の授業はどのような時間かに対して年度当初より変化が見られた。以下子供の解答である。

- C1「自己理解・他者理解ができる時間」
- C2「今までの自分とこれからの自分をつなぎ、生きていくために大切なことを考えることのできる時間」
- C3「自分にとって身近なことを考える時間」「自分を振り返り、見つめ直す時間」
- C4「お話から考えた価値を自分に貯めていく時間」「子供の花さき山の振り返りより」

子供の本音が垣間見えるものである。



今の自分のありのままの姿を残すことの重要性を多くの子供が感じ、素直な心を大切にしようとする意識をもつことができるようになってきている。

年間を通して子供の成果を見取ることはできたが、課題も残っている。それは、内容項目のテーマ設定には課題がある。教師が提示するのか、子供の問いだけでいいのか、全員同じ問いにするのか否かなど、「子供とつくる学び」を通して考え続けなければならないと感じている。子供が気づき、考え、議論する中で自分を見つめ、仲間と共に成長していることを実感できるよう年間を通して考えていくことは今後も価値があると感じている。

実践報告「新次のしょうぎ」

～勝ち・負けにこだわるあまり～

「比べ読み」（主教材と副教材など複数のものを授業の中で扱うことや比べる視点を明確にして、お話を読み進めること）をすることで、「過ちは素直に改め、正直に明るい心で生活すること」に迫る授業である。

具体的には3つの「比較」を用いて進めていった。以下は、授業の様子とそこで感じた課題である。授業で取り扱った順番で記述していく。

①新次（主人公）の対局について比べる。

教材には新次と伊三郎おじさん、新次と佐平おじさん2回の対局場面が描かれている。

1回目は、新次と伊三郎おじさんの対局。この対局場面では、新次がずるをして伊三郎おじさんに勝ったことから新次の気持ちを考えた。新次は「勝ちたい」という思い一心で行動に移してしまったことを理解することができた。

2回目の対局は新次と佐平おじさん。この対局は、新次がずるをした後に行われる。この場面においても新次に寄り添ってその時の気持ちを考えた。同じように将棋をやっているにも関わらず、気持ちが落ち着かなかったり、不安になったりすることがある

ことに改めて子供たちは気づくことができた。

新次のずるという行動がその後の心を左右することは、日常でもふとした場面で経験している子どもおり、自分たちにもよくあることだと気づいていた。

～板書の一部抜粋～

新次将棋好き・強い
伊三郎おじさん勝った
ちよつと嬉しい

【自分の弱さに負けた】
佐平おじさん 負けた
少し緊張している
後悔している
モヤモヤを引きずっている
悔しい(あんなこととしてしまった)

板書で2人との対局を比較しやすいように並列で書くことによって、子供は場面ごとに理解をし、自然と比べ、自分の経験とも重ね合わせることができたと考えられる。

課題としては、桂馬を横に動かしたところや駒を慎重に動かしたところについてもう少し時間をかけて共通理解を図る必要性があったと感じている。本時では2つの対局を考える際、1回目は「新次の手は、自分の桂馬を横に動かしたのである。」を手掛かりとし、2回目は「新次は、一生懸命に、しんちょうにこまを動かしていった。」という教材文を手掛かりとした。

しかし、中心発問の「かさを持つ手に新次のなみだがこぼれた時の気持ちを考えよう」では、新次に同化しることができなかった。意見の中で「悔し涙」も含まれる意味合いを持つことになってしまった。「しんちょう」という言葉は2回の対局場面で出てくると共に、なみだをこらえた場面を考えることで深めていけるのではと振り返りを通して感じている。

②既習の内容項目の考えと比べる。

教材を読み進めていく中で、新次は「勝ちたい」という思いを行動に移したということ再度確認した。その際に実際に桂馬の駒を動かす場面を再現し、

新次の気持ちに寄り添うことができた。その後、「新次は自分自身の気持ちに正直であるのではないか。」と問い返した。すると、子供たちは「正直 五十円分」で考えた「正直とは」について思い出し、ロイロノートで確かめ、再度「正直とは」について自然と考えることができた。

「正直 五十円分」にも2つの場面がある。1つ目はお釣りが足りなくてお店に戻る場面。2つ目は、お釣りが多くてお店に返しに行く場面。この授業も比較を用いて行っていたので、思い出しやすい場面である。「正直 五十円分」はさすがにいい場面でおわっている。その後振り返りでは、「正直であることはいいことだ。」「正直であることは生きていく上で大切だ。」という考えがでてきた。その考えをもとに、「新次のしょうぎ」についても考えを進めていくと、正直にも善い正直と悪い正直があることや本当に新次は正直に桂馬の駒を動かしたのかなど、正直について自分の考えを再構築することができた。

「正直 五十円分」で考えた子供の「正直とは？」

◎正直とは？
嘘をつかない事。友達などには勿論まず自分に嘘をつかない自分をごまかして自分ではできると思っている人は何もできない。

正直で怒らないで
自分が嘘をついて、言っていることと違うし、知りたくない、あったことを全部話すこと... 本人は思っているけれど全て言えずに...

◎改めて正直とは？
結局自分の心をよく知っていて使い分けられることだと思いました。

正直で怒らないで
嘘をつかないことだが、自分の思っていること全てを話す、構う人もいないので、人のことを考えた上で、嘘をつかずに言うこと。

このように考えの軌跡を残していくことで、同じ内容項目での考えを少しずつ子供自身で深めることができるようになっていく。

課題としては、「正直にできなかったのは桂馬を動かしたことを伊三郎おじさんに伝えることができなかったこと」であるので、教材文と子供の価値を考える場面でのズレが生じたと考えられる。

③自分の過去の経験と比べる。

自分の経験を比べることは、教材を身近に感じることができ、自分を振り返る良いきっかけであった。子供たちはクラスの中で自分の経験を思い出し、4伝えることができていた。

C1 「カードゲームで自分もずるをしてしまったことがある。きっとお母さんは気づいていたと思うけど、正直には言えなかった。」

C2 「弟のおやつを食べてしまったけど、次の日に増やしておいた。」

このように、生活場面から考え価値に結び付けようとする姿が見られた。クラスの雰囲気を支えられ、失敗したことも伝えることができたと考えられる。

しかし、見方を変えれば、子供が今までの反省を述べているだけの時間になってしまっていたのではないかと考えられる。

課題としては、「正直に過ごすためには、自分自身で過ちを認め、その後はどうするのか」を考えることができなかった子供もいたと考えられる。経験を想起させ、教材との乖離を防ぎたいが、自分事として考えるには、教材の向き、不向きや内容理解が影響することを改めて感じた。だからこそ、教材分析をし、教材にたくさんのある道徳的価値の中から内容項目を焦点化させることで、授業の中で考えることが明確になると考えられる。

全体を通して、「比較」という手立てを振り返ってみると以下の効果があったと考えられる。

効果① 子供たちには他教科でも取り組んだことのある方法で馴染みがあり、教材の内容理解がスムーズであった。

効果② 馴染みがあることで、時間を有効的に使うことができた。

効果③ 子どもが学びの連続性を感じる事ができた。前の教材とのつながり、他教科とのつながり、日常とのつながり、仲間とのつながりなど、物事を

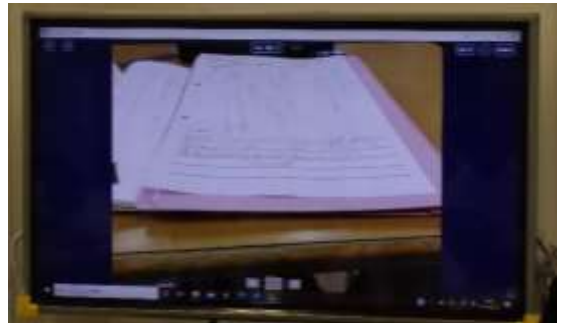
様々な角度から捉えようとする姿が見られた。振り返り場面では、自分の考えを ICT（ロイロノート）に貯めていくことが自然とできるようになった。

貯めていくことに価値があり、見直すことの良さにも気づいている子供も多い。

振り返りを書いたらすぐに写真に撮って提出している様子。



自分の貯金だけでなく、すぐに共有できるメリットがある。下の写真は共有の様子である。



上のように画面に映すことは共有の有効的手段である。また、それを子供自身が感じている。

おわりに

特別の教科道徳では、やはり子供の本音が出てくるものを目指していきたい。また、本音を受け止めるだけの人間関係の土壌が必要である。教材の中で、問うべきところを明確にし、価値から離れ、自分の解釈での考えを発表することになってしまわないようにしていく。この授業を通して、「比べ読み」で内容項目について積み重ねていくことは一定の効果があると言える。教材すべてにこの方法が合うとは限らないので、見極める力と教材分析を怠らないことは必要不可欠である。子供が自分を見つめ続けるために、物事は様々なこととつながっているということを今後も実感できるようにしていきたい。